

Pivotal Meeting Report

第 84 回日本血液学会学術総会 (The 84th Annual Meeting of the Japanese Society of Hematology)

第 84 回日本血液学会学術集会に参加して： 造血器腫瘍領域ゲノム診療の近未来

東京医科大学血液内科学分野 岡 部 聖 一

2022 年 10 月 14 日から 16 日まで、福岡市にある福岡国際会議場で開催された、第 84 回日本血液学会学術集会に参加させていただきました。全世界的な新型コロナウイルス感染症の蔓延により日本でも罹患症例が増加しており、新型コロナウイルスの第 7 波や今後の第 8 波の到来の可能性や感染症予防対策など、連日のようにニュースに取り上げられています。新型コロナウイルス感染者の死亡例が多く発生していたこと、感染の終息が見えず緊急事態宣言が出されたことなどパンデミックでもあったため、日本血液学会総会は昨年と一昨年はオンラインでの開催となっていました。今回はハイブリッド形式となり、学会場で直接の発表とウェブからの発表を含んだ新しい方式での会議でした。最終日時点で 7,200 名を超える参加登録があり、また好天にも恵まれ、現地の直接来場者は 3,400 名以上あったようです。私自身、口演での発表があり現地参加をしましたが、個人的には現地に赴き、直接発表を聴くこと、またディスカッションをすることに大変意義があると思われました。ほとんどのがんは、喫煙や生活習慣、加齢などが原因となり、正常な細胞内の特定の体細胞の遺伝子が後天的に変化(変異)することによって、がん細胞が発生します。がんゲノム医療は、造血器腫瘍を含むがん組織を使って、多数の遺伝子を同時に調べるがん遺伝子パネル検査が日常診療においても用いられるようになり、がん遺伝子パネル検査の一部は保険診療で可能となっています。また先進医療でも行われており、臨床研究も活発にすすめられています。個人の遺伝子の変化や生まれ持った遺伝子の違い、いわゆる遺伝子変異を解析することによってがんの性質を明ら

かにし、ゲノム情報に基づく薬物療法が行われるようになってきています。このゲノム医療の解釈のための模擬患者を討論するセッションが学会で開催されており、検査結果やその解釈、推奨される対策などのディスカッションがされていました。このように今後の造血器腫瘍を含む、がん症例などでのゲノム医療が日常診療でも重要になると再認識した次第です。さらに新規の薬剤の登場により、造血器腫瘍を含めた血液疾患の治療法が変わりつつあります。分子標的薬の有効性や副作用対策などが教育講演を含めた演題に取り上げられていました。今後の血液疾患に対して研究が進み、症例の予後の改善が得られることが期待されました。

